



落語にシンギュラリティーはあるのか？

■ 桂 三幸



■知らないことの怖さと、落語の未来を切り開く情熱

このコラムを書きながら、ふと気づく。第2回の執筆者が私の師匠、桂文枝だったとは！ 同じ場で筆を執れるなんて光栄だが、事前に一言教えてほしかった……覚悟が必要だから。

師匠のコラムにこんな一節がある。「最新機器は持つが、使いこなすのは弟子の方がはるかに早い」と。あの弟子とは私のことだ。

iPadが発売された日、師匠がさっそく手にしているのを見て、「これは何か面白いことができそうだ」と直感し、すぐさま自分も購入。それがきっかけで、iPadを使った漫談に挑戦した。今なお最新機器を軽やかに操る師匠の姿は、なんとも素敵だ。

私も負けじと、音や映像を織り交ぜたり、歌ったり、時にはお客様とスポーツを楽しんだりする「ハイブリッド落語」を追求している。このコラムを書くきっかけも、毎年挑戦しているIT落語にある。

時代とともに変わるもの、変わらないもの「知らない」という怖さを、映画『三丁目の夕日』の一場面が教えてくれる。新品の冷蔵庫が届き、家族が喜びに沸く中、家の外ではいつもの氷屋さんが寂しそうに肩を落として去っていく。あの切なさ……それが時代の流れだ。

残そうとする力と、変わろうとする力。古典芸能である落語は、このままでいいのだろうか。取り残されてしまわないか。

「地球が丸いのは、隅っこにいて情報が届かないことを防ぐためだ」と私は思う。知る権利は誰にでも平等にある。そして、「寿命が延びているのは、より多くの情報を得るチャンスを与えられるためだ」とも思う。知ろうとすれば、機会は無限にある。「知らなかった」では済まされない時代なのだ。

■落語のメインフレームとイノベーション

落語の核は、落語家や登場人物が時代を超えて描く、侘び寂びや義理人情といった不変の人間性だ。

一方で、落語の革新は、現代社会に寄り添い、最新技術を取り入れ、進化した道徳や優しさを反映することにある。

■ 桂 三幸
落語家／吉本興業

2002 年桂三枝（現六代文枝）に入門。2006 年から毎年 IT 落語を披露。2019 年より関西大学、甲南女子大学で非常勤。2024 年 e モータースポーツで上位に入り、MAZDA のサポートで実車レースデビュー。



デジタルとアナログ、相反するようでいて、実は共存できる。だって、どちらも 4 文字だもの……ちょっと弱い例えかも知れませんが……。

技術と融合したハイブリッド落語を突き詰めつつ、古典落語の人間性を磨き上げる挑戦も続けたい。

落語は「すべてを見せない」芸術だ。想像の余地を残すことが、その魅力の 1 つ。

たとえば恋愛噺では、2 人がその後どうなったかはお客様の心に委ねることもある。無責任？

いや、それが落語の粋なのだ。

映像や音ですべてを提供できる現代だからこそ、与えずに、お客様が想像する「その先の物語」を大切にしたい。

■ 落語の未来を、皆さんとともに

皆さんは、落語の未来をどう想像するだろうか？

2024 年 5 月 6 日、私は「第 1 回メタバース寄席」を開催した。演者は私のアバター、お客様も 15 名ほどのアバター。プロの落語家によるメタバース寄席は、おそらく世界初の試みだった。

夢はもっと大きい。1 万人を超える「スタジアム落語会」を開催したい。

「そんなに集まるの？」 大丈夫！

AI アバターにお客様を依頼すれば、いつでも満席の寄席が実現可能。

そんな未来が、すぐそこまで来ている。

落語は形を変えながら、きっと生き続ける。

その歴史を長く見届けるためにも、皆様にはお願いがある。

1 秒でも長く、豊かな人生を生きるための「素早く、正確で、適切な量の情報」を届けるシステムを、ぜひ築き上げてほしい。

私も、落語の新たな可能性を切り開きながら、その未来をともに創っていきたいと思う。